

## 学校の中の敬語行動調査

著者	尾崎 喜光
雑誌名	国立国語研究所創立50周年記念 研究発表会資料集 ： 歩こう日本語の世界を
ページ	197-202
発行年	1998-12-14
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00003330">http://doi.org/10.15084/00003330</a>

# 学校の中の敬語行動調査

言語行動研究部第一研究室

尾崎 喜光

(E-mail: yozaki@kokken.go.jp)

## 要旨

当研究室の任務と、これまでおこなってきた敬語行動関係の調査をまず紹介する。その後で、これまでの敬語行動調査の展開として最近おこなった「学校の中の敬語行動調査」について、調査の方法・観点・データの処理方法を概説し、面接調査の文字化のサンプルとアンケート調査の集計結果の一部を示し、そこからわかることを指摘する。

キーワード 敬語行動 言葉の使い分け 学校生活 人称詞 地域差

## 1. 当研究室の任務

日本語社会における言語生活（主として話し言葉）について、言葉の使用者である「人」や、言葉が向けられる相手をはじめとする他者との「人間関係」、あるいは言語が使用される「状況」など、言葉そのものを取り巻くさまざまな言語環境に注目し、そうした事項を考慮しながら私たちがいかに言葉を使っているか・使い分けているか、ということを明らかにすることを任務としている。

つまり、同じ意味内容のことを言う場合でも、誰が言うか、どういう関係の相手に向かって言うか、どういう場面で言うかなどによって表現の仕方が変わってくるが、そのありさまを明らかにする。

こうした、＜言語環境＞との関連において＜言葉＞を考える分野のことを「社会言語学」と言う。当研究室では、その研究領域の中でも、特に相手や状況といった＜場面＞による言葉の使い分け、すなわち敬語使用（敬語行動）の実態について調査研究を継続している。

## 2. 国立国語研究所がおこなってきた「敬語行動」に関するおもな研究

### ①地域社会での敬語行動調査 調査年

- ・岡崎市での調査[1回目] (1953～54) →『国研報告11 敬語と敬語意識』(1957)
- ・       "       [2回目] (1972～73) →『国研報告77 敬語と敬語意識—岡崎における20年前との比較—』(1983)
- ・秋田県・富山県での調査 (1982～84) →『国研報告86 社会変化と敬語行動の標準』(1986)

### ②企業の中での敬語行動調査

- ・日立製作所・日鐵建材での調査 (1975～77)  
→『国研報告73 企業の中の敬語』(1982)

## 3. 学校の中の生徒たちの敬語行動に関する調査

高い敬語形式は主として大人の社会で使われるものであるが、中学生・高校生といった子供たちの間でも、先生との会話、上級生との会話、改まった状況では敬語が使われ始めているようである。この点について明らかにすべく調査を実施し、現在分析を進めている。調査は1989年～1992年にかけておこなった。

#### 4. 学校の中の敬語行動調査の方法

##### A. 郵送によるアンケート調査（概観調査）

###### 【調査対象】

山形県：中学1校…… 339人

大阪府：高校10校……1,004人

東京都：中学21校……2,456人，高校25校……2,222人 総計6,021人

###### 【おもな観点】

①話し相手との関係による言葉の使い分け状況

（例）人称詞（自称詞・対称詞），挨拶形式

\*これらは敬語形式そのものではないが，實際上敬語として機能している。

②敬語に関する意識・意見・経験

（例）学校生活の中で言葉遣いが気になるか，学校生活での敬語の必要性

###### 【収集したデータの処理】

①コンピュータにデータを入力しするために，回収した調査票にコードを記入。

②データベースソフトを使いコンピュータにデータ（コード）を入力。

③入力ミスがないかの校正。

④コンピュータで集計。地域ごと，設問項目別に単純集計，男女別のクロス集計。

⑤集計結果をグラフ化し，数値データも参照しながら分析。＜現在進行中＞

##### B. 面接調査（事例調査）

###### 【調査対象】

山形県：中学1校……1グループ6人×7グループ＝42人

大阪府：高校2校……1グループ6人×18グループ＝108人

東京都：中学3校，高校5校……1グループ6人×1校4グループ×8校＝192人

総計342人

###### 【おもな観点】

①話し相手と（第三者）の関係による言葉の使い分け状況

（例）「ワタシワ 行クケレドモ オマエワ 行クカ？」「ウン，行クヨ。」

（例）「〇〇サン，△△サンワ 教室ニ マダ イマシタカ？」

「ウン，マダ イタヨ。」

（例）「先生，ウチノ母ガ先生ニ話ガアルト言ッテイマシタ。」

②主として場面（公的場面か私的場面か）による言葉の使い分け状況

（例）「〇〇サン，モーイチド 言ッテクダサイ。」「ハイ，ワカリマシタ。」

###### 【調査方法】

①6人1組のグループを作ってもらう。（クラス関係・クラブ関係・委員会関係）

②調査員3人で同時進行の形で調査。6人による総当り戦形式での調査。

	調査員α	調査員β	調査員γ
1回目…	A, B	C, D	E, F
2回目…	A, C	B, E	D, F
3回目…	D, E	A, F	B, C
4回目…	B, F	C, E	A, D
5回目…	C, F	B, D	A, E

\*自分以外の5人を相手にして同じ意味内容のことを言う場合，言葉遣いがどう変わるかを見ようとした。

【収集したデータの処理】

- ①調査現場で録音した発話を紙の上（調査票）に文字化。
- ②データベースソフトを使いコンピュータに文字化資料をまるごと入力。
- ③注目する項目ごとに分割したデータを，②に追加入力。
- ④入力ミスがないかの校正。＜現在進行中＞
- ⑤項目ごとに集計したり，グループごとにマトリックスを作成したりして，分析。

5. 面接調査による結果の紹介

＊山形県の中学校の＜女子バレーボール部＞のBさん（1年）とDさん（2年）のやりとり

★「ワタシワ 行クケレドモ オマエワ 行クカ？」「ウン，行クヨ。」

B（1f）：利恵先輩，アシタ野球部ノ試合見サ行クアンドモヤァ 利恵先輩モ行グゥ？

D（2f）：ウン，行ク。

D（2f）：メク° ャ，オイワアノ アシタノ野球部ノ試合ノ応援サ行グッケド，メク°  
ワ 行クゥ？

B（1f）：ウン，行グ。

★「〇〇サン，モーイチド 言ッテクダサイ。」「ハイ，ワカリマシタ。」

【私的場面＝クラブ活動の休憩時間】

B（1f）：利恵先輩，ココヨグワガンネガッタカラァ モー1回説明シテエ。

D（2f）：ア，ウン，ワガッタ。

D（2f）：メク° ャ，今ンドゴ ワガンネガッタカラ モー1回説明シテエ。

B（1f）：アー，ウン。

【公的場面＝クラブ活動のミーティング】

B（1f）：り，利恵先輩，ココカ° ヨクワカラナカッタノデ モー1度説明シテクダサ  
イ。

D（2f）：ハイ。

D（2f）：めぐみ【メク° ミ】サン，今ノトコロカ° ワカラナカッタノデ モー1度説  
明シテクダサイ。

B（1f）：ハイ。

★「〇〇サン，△△サンワ 教室ニ マダ イマシタカ？」「ウン，マダ イタヨ。」

B（1f）：利恵先輩，結香ちゃん（1年）体育館中【ナガ】サ イッダッケエ？

D（2f）：イッタッケヨォ【上昇】。

B（1f）：利恵先輩，さなえ先輩（2年）体育館ノ中【ナガ】サ イッダッケエ？

D（2f）：ウン，イッダッケ。

B（1f）：利恵先輩，妃美先輩（3年）体育館ノ中【ナガ】サ イッダッケエ？

D（2f）：ウン，イッダッケ。

B (1f) : ①利恵先輩, キミセ【言いさし】, ア, 聖子先輩 (3年) 体育館ノ中【ナガ】サ イッタッケェ? ②' 利恵先輩, 聖子先輩 体育館ノ中【ナガ】サ イッダッケ?

D (2f) : ①ウン, イダッケ。 ②' ウン, イッダッケ。

B (1f) : 利恵先輩, 【やや間】デコパッチ (顧問) ヤァ体育館ノ中【ナガ】サ イッダッケェ?

D (2f) : ウン, イッダッケ。

D (2f) : メク°, 結香ちゃん (1年) マダ体育館サ イッダッケェ【下降】?

B (1f) : ウン, イッダッケ。

D (2f) : メク°, サナちゃん (2年) マダ体育館サ イッダッケェ?

B (1f) : ウン, イッダッケ。

D (2f) : メク°, 妃美先輩 (3年) マダ体育館サ イッダッケェ?

B (1f) : ウン, イッダッケ。

D (2f) : メク°, 聖子先輩 (3年) マダ カ【言いさし】, 体育館ノ中【ナガ】サ イッタッケ?

B (1f) : ウン, イダッケ。

D (2f) : メク°, 先生 (顧問) マダ体育館サ イッダッケェ?

B (1f) : ウン, イッダッケ。

## 6. アンケート調査による結果の紹介ー自称詞の使い分け

\*グラフは、『平成8年度国立国語研究所公開研究発表会 テーマ：学校の中の敬語』の予稿集から抜粋したものである。

### 【解説】

図1は、山形での状況について、方言形式オイに注目して、場面別(=相手別)×男女別に集計したもの。

設定した場面は全部で6つ。グラフの上の方から順に、「同性友人」「異性同級」「同性先輩」「担任」「校長」「来客(男)」の6つの場面。グラフの下的人物になるほど気の張る相手、逆に上の人物ほど気楽にしゃべれる相手、というように配置してある。専門的な言葉で言うと、グラフの下側ほど<上位場面>, 上側ほど<下位場面>。

男女ともある程度の使用率がある。

東京などでは、大人の場合には男女共通に使える言葉として「ワタシ」や「ワタクシ」があるが、男子生徒がまだ「ワタシ」「ワタクシ」を使わない中学・高校くらいの生徒たちの間では、男女共通に使える自称の代名詞というのは存在しない。これに対し山形では、男女とも普通に使える言い方がいくつかあり、その代表的な形式が「オイ」。

「オイ」は、相手がだれであるかという<場面>により使用率が大きく異なっている。

上位場面になるほど、男女ともに使用率が下がる傾向にある。特に、対校長・対来客

(男)での使用率は低く、とりわけ女子の間では皆無に近い(=東京の者が突然訪問しても聞くことはあまり期待できない)。こうした方言的な表現は、いつでも誰に対しても使っているという訳ではなく、相手によって使い分けられている。

グラフを細かく見ると、「同性先輩」の位置付けが男女で随分異なっている。数値を見ると、男子では生徒寄り、女子では先生寄りである。つまり、山形の男子にとっては先輩は友人に近い存在、それに対し女子にとっては、先輩は担任の先生に近い存在。対人的な距離感が男女で異なるケース。

図2は、「オレ」について、東京中学の男子と、山形中学の男子を比較したもの。東京・山形ともに、上位場面で使用率が低くなる。このグラフでも、山形では、「同性先輩」は友達に近い扱いであることがわかる。

図3は、「ボク」について、東京中学の男子と、山形中学の男子を比較したもの。

図2の「オレ」と対比的に、東京・山形ともに、上位場面で使用率が高くなる。つまり、<良い言葉>と意識されている。この点、大人の社会と随分異なる。つまり、「ワタシ」がまだ使用語彙ではない子供たちにとっては、「オレ」などとの相対関係で、「ボク」は上位場面に使うべき<良い言葉>と意識されている。

図4は、「ワタシ」について、東京中学の女子と山形中学の女子を比較したもの。

これも、東京・山形ともに上位場面で使用率が高くなる。

図3と図4について、東京と山形を比べると、いずれも大きな傾向は同じだが、“使い分け方”に少し違いが認められる。

図3で山形と東京を比べてみると、山形のボクは、対同性友人・対異性同級・対同性先輩で使用率が随分低くなっていて、場面による使用率の減り張りがはっきりしている。それに対し東京では傾斜が比較的ゆるやかである。つまり、「ボク」という言葉は、東京では丁寧度が比較的ニュートラルな言葉であり、誰に対してもある程度使える言葉。それに対し山形では、先生や大人を相手にした時くらいにしか使わない非常に改まりの度合いの強い・使い分けがはっきりした言葉と言える。

すなわち、山形では、「ボク」という言い方は待遇表現として非常に積極的に機能していて、「待遇表現としての機能負担の量」が相対的に大きい言葉。それに対して東京では、待遇表現として山形ほど積極的には機能していない、「待遇表現としての機能負担の量」が相対的に小さい言葉。図4の「ワタシ」についてもこれと同じことが言える。

「ボク」や「ワタシ」のように、語形自体は方言的ではないが、使い分け方・運用面に方言性・地域性が見られる場合があることも、この調査から明らかになったことの一つ(言語行動における方言性・“かくれた”方言)。

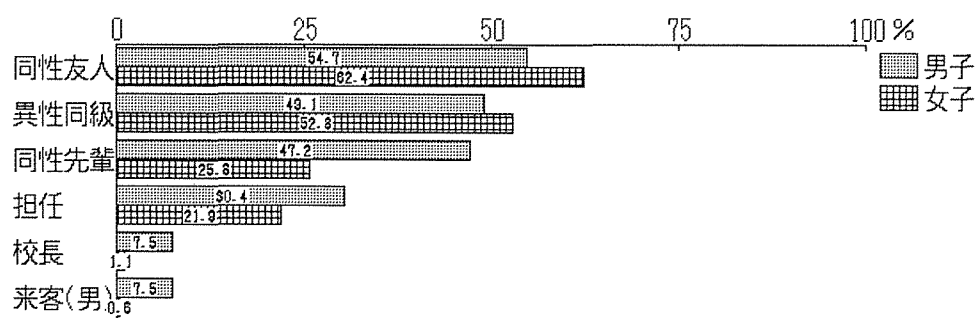


図1. 「オイ」の相手別使用率 [山形]

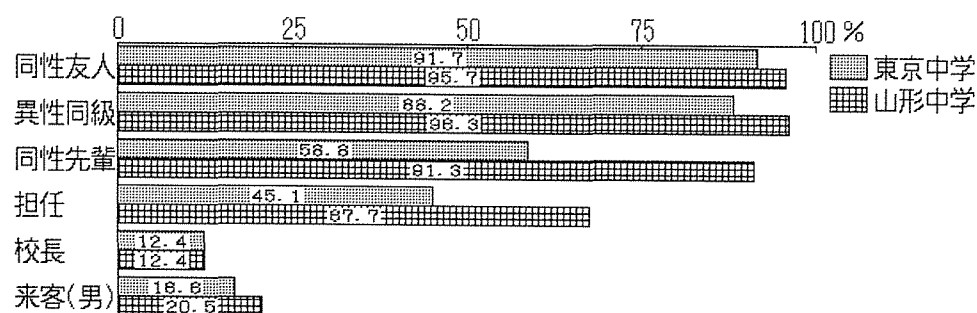


図2. 「オレ」の相手別使用率の地域差 [男子]

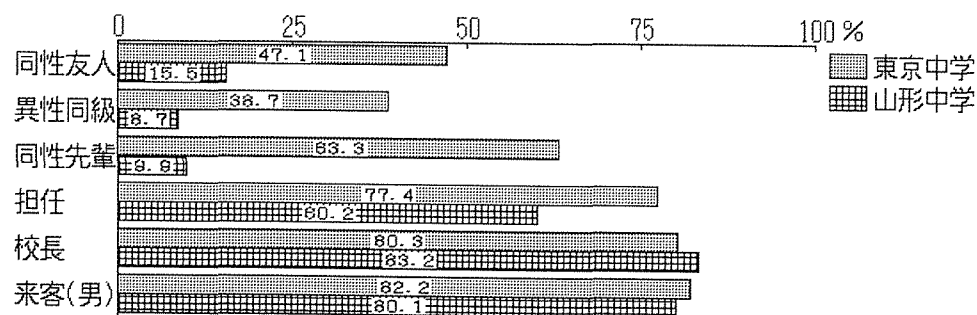


図3. 「ボク」の相手別使用率の地域差 [男子]

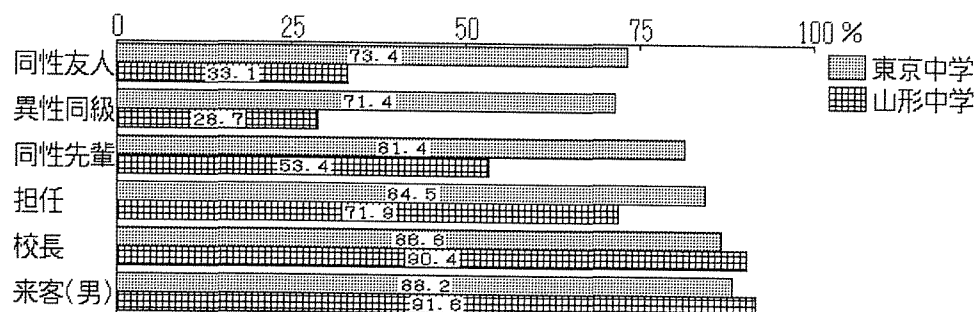


図4. 「ワタシ」の相手別使用率の地域差 [女子]